

『勇者たちに毎日セックスで魔力補給がんばりますっ！』 ティサ編

—見本—

「え？え？こ、これは！ぼくのおちんちんがなくなってますっ」

「……そのようですね……。すこし触っても？」

はやく助けてもらいたい一心でこくこくと頷くと、ティサは短い呪文を唱えるとゆっくりその水の中に手を入れる。ノアの股間にたどり着くとするりと肌を撫でるとやはりそこにはノアのペニスはないことが確認される。さらに指を滑らせると割れ目に到着し、少し中指を割れ目の間に挟むと小さな肉芽に触れた。そしてその瞬間ノアの腰が少しピクリと反応した。

「ん……」

「すみません」

ティサがさつと手をどけると、これはあべこべスライムだと教えてくれた。美しい湖や川に生息するスライムの一種で、触れた生物を逆の性質に転換させてしまう特性を持つらしい。他にもいろいろと補足を説明してくれたが、ノアはそれどころではなく抱き留めら

れたティサの腕の中でもじもじと息を乱す。

「ん？どうかしたのか？御子」

ノアにも何が起こっているのかわからないが、スライムに飲まれてる股間のあたりがうずうずと疼き、さきほど触られた場所をもっと触りたくてたまらず、身体が火照るのだ。

「はあっはあっ……ティサ様、さっきのところ、触ってくれませんか」

左手を伸ばすと縋りつくようにティサの衣にきゅっと掴んだ。体温が上がったせいで夜の外気温がすこし肌寒く感じているのか、あらわになってくるノアの胸の突起もかわいらしくぴんつと尖っている。ノアは明らかに発情している。そして幼いながらもその煽情的な姿にティサもまたごくりと生唾を飲んだ。

「御子はどうしたい？」

ずるい質問だ。ノアはまだ幼く、ティサはエルフであるためどの人種よりも長く生きてきて知識や経験も多い。分別がつかない者に選択させるのはずるい大人のすることだ。しかし、御子と勇者、魔力を補給しあう者同士という関係上、その行為は必然である。ティサはまだノアとセックスはしていないが、いつかはこうなっているはずだった。遅かれ早かれこうなることはわかっているのだ。仕方ないことだ。ティサはそう自分に言い聞かせた。

「ここを、触ってください」

「わかった」

そう言うときスライムに手をかざし再び短い詠唱をすると、腰にまわりついていたスライムが移動しはじめそのままとふんと湖へ帰っていく。やっと身軽になれたものの、この疼きはまだ続いている。どうなっているのか恐る恐る足を開き自分の指で割れ目を開くと、小さな豆粒ほどのペニスが見えた。

「ぼ、ぼくのおちんちんがこんなになっちゃいましたっ」

ううっと泣きそうになりながら訴える姿は本人にとっては必至だが、ティサはその卑猥な姿に足元がぐらつきそうさ。そのまましゃがみ込むと顔を股間に近づける。

「これはクリトリスというんですよ」

「んっ、くりっ、っとりす？」

ティサが露になったままのクリトリスの前で話すので息が時々かかる、そしてそのたびにくすぐったいような甘い痺れがノアの腰に走る。ぴくぴくと腰が動く姿が愛おしく感じ、いたずら心でふーっと優しく息を吹きかけると更にその腰が跳ねた。

「はああんっ、ティサ様っ、それっ、だめえ」

「どうして？気持ちよさそうに腰が跳ねてますよ？かわいい」

ノアの太ももに手を置くと手に吸い付くようなしっとりした感触で気持ちがいい。

「そのまま手で持っていて」

そう言い顔を近づけると、べろりと差し出した舌で肉が全体を優しく舐めとった。